

【試し読み】

新天理図書館善本叢書

第30巻 奈良絵本集 8

(2020年2月刊行・八木書店)

解題

齋藤真麻理・石川透

※本書の詳細は下記サイトをご参照ください。

<https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/512>

※解題中の参考図版は非表示にしております。

『奈良絵本集八』  
解題

石 齋  
川 藤  
透 真麻理

## 虫妹背物語

装訂 卷子装 一軸

表紙 砥粉色地に銀泥の菊小紋文様。見返しは金銀切箔散らし。

料紙 黄の唐紙

法量 表紙、縦二四・〇cm×横三五・五cm。全長一三m六五・七cm。十一紙。一紙の寸法は一m三二cm前後。

外題等 なし。箱蓋表中央に「虫妹背物語御卷物」と墨書。

字高 二二・〇cm内外

挿絵 十三図

印記 「寶玲文庫」

書写年代 享保二年（二七一七）写。

備考 箱蓋裏に「享保二酉歲正月十五日 畫狩野幽知／詞書山田藤四郎」と墨書。

（請求記号九一三・五一イ三二五）

本作は虫たちの恋愛譚を主題とする異類物の室町物語である。中近世日本の文芸において、とりわけ美しい虫として登場するのが玉虫であり、『玉虫のさうし』など、虫の恋の歌合を綴った室町物語も制作されている。本作も玉虫を主人公とし、和歌文学の潮流の中に生を受けたと思われる作品である。まずは物語の梗概を示す。

ある月見の管弦の折、蟬の衛門の督は、きりぎりすの紀伊守や蛸ひぐらしの備中守から、美しい玉虫姫の噂を聞く。以来、恋慕の情を募らせた蟬は、玉虫姫の乳母であるこうろぎの局の媒で文を送る。彼女の手引きによって玉虫姫との逢瀬も叶い、蟬は蝸螂かまじりの手長に吉日を占わせて盛大な祝言をあげる。一方、きりぎりすと蛸は出家し、螢の君も焦がれ死にってしまう。やがて玉虫姫は重い病に臥すが、それは恋に破れた諸虫が取り憑いていたのであった。けら巫女の力で姫は命を取り留め、妹背の仲はいよいよ深まった。姫はめでたく懐妊して玉のような若君を安産する。蟬は愛らしい若君を胸に抱き、一家は喜びに満ちた。世の虫の幸福のためしとして、まず玉虫を引くのである。

以下、主要伝本を示す。

(一) 本書Ⅱ天理図書館本 絵巻一軸 『室町時代物語大成』一三。開館八十六周年記念展『御伽草子』奈良絵本・絵巻を中心に』天理図書館、二〇一六年)

(二) 慶應義塾図書館本 絵巻一軸 (『虫物語』。冒頭二図を欠く。石川透「慶應義塾図書館蔵(虫物語) 解題・翻刻」『古典資料研究』一、二〇〇〇年六月。『室町時代物語大成』一三に(五)とともに校合本として用いられる。「慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション」より全デジタル画像を公開)

(三) くもん子ども研究所本 絵巻一軸 (『玉むし物語』。昭和六年の古筆了信の極「玉虫物語絵詞巻物一巻(中略) 絵 住吉如慶廣道壯年之作 詞書 大覚寺宮空性親王」云々が添えられている。整理番号 KUMMON0363。「公文教育研究会子ども文化史料閲覧データベース」より全デジタル画

像を公開)

(四) 刈谷市立図書館蔵『蓬廬雜鈔』卷七十三所収絵巻詞書 「虫物語」。挿絵なし。国文学研究

料館にマイクロフィルム、紙焼写真を所蔵。請求番号 301421-502、J106)

(五) 藤井隆氏本 一冊 「虫物語」。江戸時代末期写。挿絵なし。未刊国文資料第三期第十一冊『未刊御伽草子集と研究』四、一九六七年)

諸本の詞書に大きな異同は認められない。挿絵は豪華な婚礼行列や宴のさまなど、『鼠の草子絵巻』(新天理図書館善本叢書23『奈良絵本集』一、八木書店、二〇一八年)等々と同じく、登場者たちの賑やかな会話とともに展開されてゆく。画中詞には口語が多用され、物語に活気を与えている。中でも、尖った口を嫌われた虫は興ざめし、「きやうとい人や」と不満を漏らしているが(本書三一頁)、これは「けうとし」の近世初期には変化が見られる語であり(『日葡辞書』)、本作の成立時期を示唆していよう。「おとまし」(本書一一頁)も「うとまし」の音変化であり、近世に入ってから用例が多い。また、こうろぎの局の名を「青つら」と記すのは、本書の画中詞のみである。

慶應義塾図書館本は、くもん子ども研究所本と挿絵の構図等が非常に近く、本書とは婚礼行列の掲出順が異なる。即ち、慶應義塾図書館本は、①本書二七―二九頁「あのかつきの内のみめのわるさや」から姫君の蝸牛の牛車のさま、長刀を持つ虫まで、②本書二四―二五頁の駕籠を担ぐ虫たち、③本書二二―二四頁、正面を向く供の虫「もちとしや、こらや、飯酒かいかいことあらふに」まで、④本書二六頁、長持ちを担ぐ虫たち、以上の順で描かれており、画中詞やその発話者、供の虫の数など、本書とは小異が認められる。たとえば、慶應義塾図書館本のみが、駕籠の後ろに挟み箱を担ぐ二匹の虫を描き、長持ちの覆いの家紋は、本書は丸に花菱、慶應義塾図書館本は七宝、くもん子ども研究所本は沢瀉紋を添える。また、病臥する玉虫姫の背後の屏風に桜を描き、虫たちが涙にくれているさまは(くもん子ども研究所本)、うら若い玉虫姫の可憐さを強調するのみならず、美しい女性の死没場面に桜の絵や和歌、嘆き悲しむ人々を配する「九相詩絵巻」を想起させよう。人生を四季の花木に喩えるのは「観心十界図」等でも常套手段であった。慶應義塾図書館本ではこの場面の屏風に社寺を描き、本書は若君誕生の場面に三羽の白鷺を描いた屏風を配した点など、それぞれ物語世界との往還を検討する余地がある。

本作の主人公が玉虫姫であり、諸虫の求愛を拒むという結構は、夙に中世以前、「古今註」において「胚胎」<sup>(1)</sup>していた。即ち、『古今和歌集』卷十一・恋歌一「夏虫の身をいたづらになす事もひとつ思ひに因りてなりけり」(五四四番、読人しらす。新日本古典文学大系)の解釈をめぐり、諸注釈は諺「灯に入る夏虫」に触れて、「世俗ニハ、玉虫ノ、火ヲトリテキタラム虫ニアハムトイヘバ、トリニクトテ燭ニ入テ身ヲホロボスナドイヘリ」(顕昭『古今集註』)、「飛蛾ナムトノ、ヨル火ニ入テ死ヲ云也、コノ虫トモハ玉虫ヲメニセムトスル時、玉虫、火ヲトリテ来レ、アハムト云ニスカサレテ火中ニ入ナリ」(毘沙門堂本『古今集註』。国文学研究資料館蔵 <https://doi.org/10.20730/200016976>)などが見え、このような歌論・歌学の醸成の上に、玉虫姫と諸虫の恋愛譚も形作られてきたのであった。それは室町物語『玉虫のさうし』を生み、また、本作『虫妹背物語』『虫物語』をも生み出した。本書では、玉虫姫を前にした衛門の督が「かく、もえしぬるこそ、中／＼あさまじう侍れ」(二五頁)とかき口説くが、「燃え死ぬ」という表現には、遠く「古今註」の残響が感じられるのではなからうか。

中近世日本においては、本作のように異類が活躍する室町物語が数多く制作され、「異類物」と

して一群を占めるに至った。これについて、かつて市古貞次は、洋の東西を問わず、古代には擬人化された異類の説話が存するが、日本では中世に再び盛行したと指摘、その第一の理由として『古今和歌集』仮名序のような歌論の影響を掲げた（『中世小説の研究』東京大学出版会、一九五五年）<sup>(2)</sup>。本作はこの問題を改めて考える上でも有益である。付言すれば、本作の生成をめぐっては、この時代に隆盛していた草虫画の諸相や、その吉祥性なども視野に入れる必要がある<sup>(3)</sup>。

なお、本書の箱書に所見の絵師は、備前岡山藩に仕えた狩野幽直系の二代「狩野幽知」と推測される<sup>(4)</sup>。幽知は宝永元年（一七〇四）三月に家を継ぎ、元文元年（一七三六）二月、六十五歳で没した。その活躍期は、絵画、能楽、和歌等を好み、多くの絵師を抱えた藩主、池田綱政・継政の時代に相当する。とりわけ、正徳四年（一七一四）に家督を継いだ継政は大いに絵画を愛好し、自らも筆を染めて多数の作品を描き、絵師に彩色させた記録が残っている。宝永年には判形支配「絵師」席が設けられ、絵師たちは多くの絵巻の制作や模写にも従事したが、その大半は幽知ら、幽直の直系が担当した。絵師たちの「奉公書」によれば、とくに享保期（一七一六―一三六）に「御巻物」の作例が多く、幽知は享保元年九月に「御婚礼之御巻物絵」などを仕立てている（『狩野幽英奉公書』）。本書『虫妹背物語』を享保二年（一七二七）の作とする箱書を信ずるならば、この絵巻もまた、こうした文化的風土の中で育まれた可能性があろう。

（齋藤真麻理）

【注】

- (1) 徳江元正「夏虫の思ひ―古今註」から御伽草子へ―（『新日本古典文学大系月報』七、岩波書店、一九八九年七月）。徳田和夫「お伽草子『玉虫の草子』の変奏―新出伝本の紹介と翻刻を兼ねて―」（『説話論集』八、一九九八年、清文堂出版株式会社）。
- (2) 動物名を立項する類題集の営為や歌題の多様化、および異類物との関連については、久保田淳「御伽草子の和歌」（鑑賞日本古典文学二六『御伽草子 仮名草子』角川書店、一九七六年）、『論集〈題〉の和歌空間』（笠間書院、一九九二年）、齋藤真麻理「異類の時代」（『異類の歌合 室町の機智と学芸』（吉川弘文館、二〇一四年）など参照）。
- (3) 今橋理子「虫たちの在り処―擬人化の詩学」（『江戸の動物画 近世美術と文化の考古学』東京大学出版会、二〇〇四年）参照。なお、同氏は「螻蛄補蟬」の画題について、井上裕紀子氏の論を引きつつ吉祥性を認めており、本作の吉祥性を検証する上でも有益と思われる。
- (4) 片山新助『岡山藩の絵師と職人』（山陽新聞社、一九九三年）。

## 山海異形

装訂 袋綴 四冊

表紙 金泥下絵入薄茶色表紙。見返しは布目地金紙。

料紙 鳥の子紙

法量 縦一七・二cm×横二四・五cm

外題 中央紅紙金泥下絵題簽に「山海異形 神類（獸類、魚類、虫類）」

字高 約一四・〇cm

墨付 第一冊十四丁（二丁裏〜十五丁表）、第二冊七十二丁（二丁裏〜七十三丁表）、第三冊十八丁（二丁裏〜十九丁表）、第四冊九丁（二丁裏〜十丁表）。

挿絵 第一冊半丁十四図、第二冊半丁七十二図、第三冊半丁十八図、第四冊半丁九図。

印記 「田安府芸堂印」「猷英楼図書記」

紙票 帙に「日本考古学／人類学史資料 清野文庫」貼付。

書写年代 「江戸時代前期」写

（請求記号四六〇一イ一）

本書は横型奈良絵本の装訂で、本文に鳥の子紙を用いた江戸時代初期の奈良絵本群とよく似ているが、筆跡等を見る限り、寛文年間頃の江戸時代前期に制作されたものと考えられる。寛文年間頃には、縦型の豪華奈良絵本が多く制作されており、横型は珍しい。同類の内容を持つ天理図書館蔵『異国人物図説』は、本書に比して奈良絵本としての装訂は異なり、同筆とは言い難いものの、全体の雰囲気や筆法に通じるものがある。

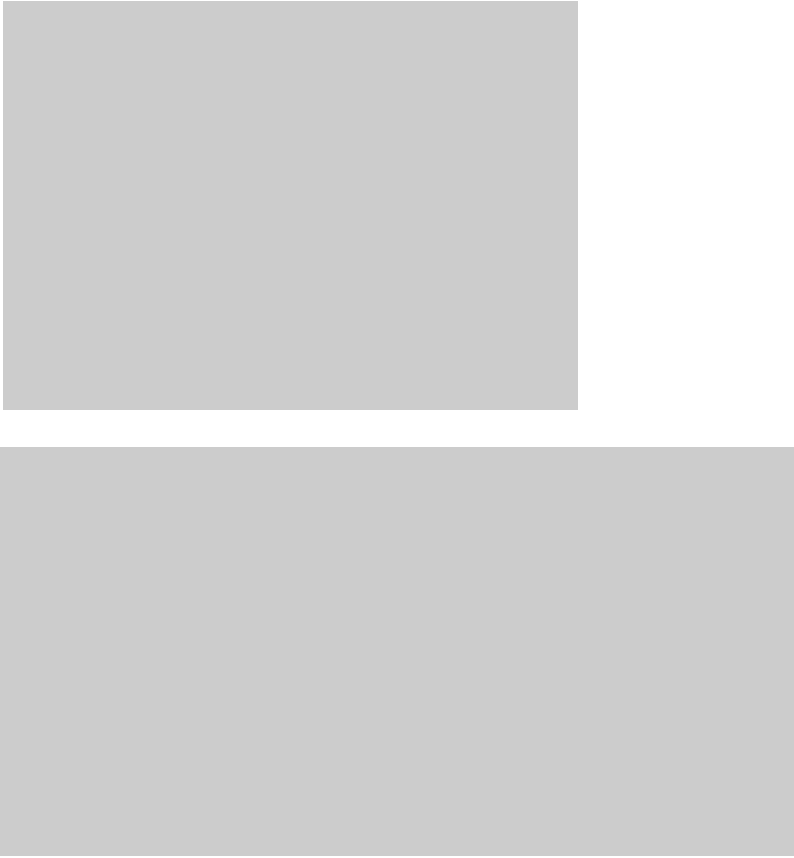
本書は田安德川家の旧蔵書であり、「猷英楼図書記」は田安家第三代齐匡の印と推定される（国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』青裳堂書店、二〇〇六年）。のちに人類学者の清野謙次を経て、天理図書館の所蔵に帰した。清野は人類学の資料として奈良絵本にも着目し、一九四七年二月には「万国人物図」の奈良絵本二点を、一九四九年九月にはこの『山海異形』を学界に紹介した。<sup>(1)</sup> 清野が記したとおり、本書は『三才図会』や『本草綱目』、あるいは『山海経』を彷彿とさせる異形を題材とした奈良絵本であるが、その生成には明代の出版文化が不可分に関わっている。以下、主要伝本を掲げる。

- (一) 本書 天理図書館本 袋綴四冊 （天理参考館特別展『天理図書館 古典の至宝』天理大学出版部、二〇一七年）
- (二) ニューヨーク公共図書館スペンサー・コレクション本 袋綴二冊。奈良絵本（整理番号MS#61。外題「山海異物 上（下）」、内題「山海異物」。「兪児」以下、計四十七図<sup>(2)</sup>）
- (三) 東京大学附属図書館（総合図書館）本 袋綴一冊。奈良絵本（整理番号T86/268。外題「山海異形 鳥類」。「玄鶴」以下、計二十六図）
- (四) 枋尾武氏所蔵本 奈良絵本（端本。「驕虫」以下、計一〇一図。半葉ごと）に概ね二種の異形を描く<sup>(3)</sup>
- (五) 成城大学図書館本「怪奇鳥獸図巻」 図巻一軸（整理番号388.1/KA21/W）。「精衛」以下、計七十六図。成城大学図書館ホームページより全デジタル画像を公開 <http://www.lib.seijo.ac>。

jp/Kansu/01\_kaikichojyuh.htm。『怪奇鳥獸図巻』 工作社、二〇〇一年。別冊太陽『日本の妖怪』  
平凡社、一九八七年<sup>(4)</sup>

本書との関連においてとくに注目されるのは、(二) スペンサー・コレクション本と(三) 東京大学本である。前者は本書よりも異形の数は少ないが、掲出順がよく一致する。

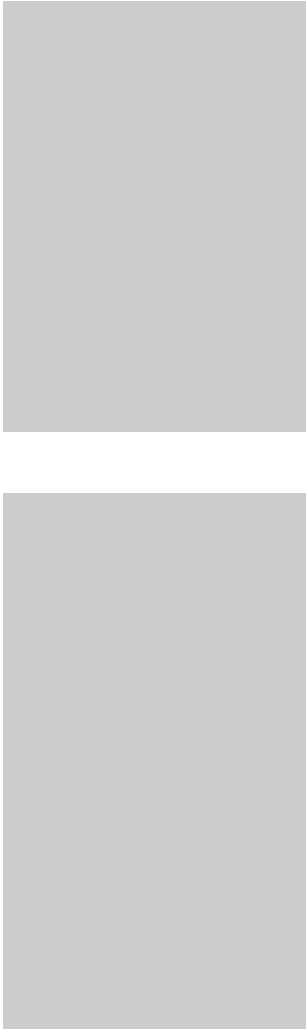
後者は縦一七・三cm、横二四・四cmの横型奈良絵本で、本書に同じく、田安家の旧蔵書であった。朱文の印記「田安府芸堂印」(四辺五・三cmの方印)、「猷英楼図書記(三・七cm×二・〇cmの長方印)があり、また、「旧和歌山徳川氏蔵」(四辺三・五cmの方印)、「南葵文庫」(四辺三・二cmの方印)を有することから、紀州徳川家の旧蔵書であったことも知られる。表紙は本書とはやや雰囲気は異なるものの、金泥下絵入りの薄茶色表紙を用い、中央に金泥下絵入りの朱の書題簽「山海異形鳥類」を貼付する。題簽を含めて筆跡は本書と同筆であり、装訂等も極めて近く、本書の連れであった可能性が高い。内題はない。見返しは金布目地、料紙は下絵のない鳥の子を用い、見開きで右に本文、左に異鳥を一図ずつ描くが、本来は魚類に属する「飛魚」一図が混在する。即ち東京大学本は、本書が欠く「禽類」のみで構成されているのであり、その点でも注目されよう。



東京大学本『山海異形』表紙と巻頭見開き  
(東京大学総合図書館所蔵)

このように異形を「神類」「鳥類」等に分類して描く趣向は、数多の異形を収載する『山海経』や『三才図会』、『本草綱目』等には見られない。しかし、中国明代の万曆・崇禎年間(一五七三―一六四四)に陸続と版行された日用類書はしばしば「諸夷門」の章を立て、版面上段に「山海異物」を立項する。そこには「神類」「禽類」「獸類」「魚虫類」の四種に大別して異形が列挙され、

挿絵と短い解説が添えられている。<sup>(5)</sup> 本書や東京大学本の分類はこれに拠る。諸本の絵画表現も明代日用類書に一致し、当該の漢文を簡略に和らげて詞書としている。スペンサー・コレクション本などは、陽明文庫蔵書に見える明代日用類書『天下全書博覽不求人』（万曆二十六年「二五九八」刊）と異形の掲出順まで一致しており、この系統の類書をほぼそのまま奈良絵本に仕立てた一本であった。<sup>(6)</sup> 一例として、「人魚」（本書「魚類」二五〇頁）は『三才図会』と明代日用類書にも載るが、その姿は両者で大きく異なり、『山海異形』が明代日用類書に拠ったことを示している。



上：国立公文書館デジタルアーカイブ『三才図会』鳥獸六卷「人魚」

下：京都市谷村文庫本『新刻群書摘要士民使用一事不求人』卷之六「人魚」。京都大学貴重資料デ

ジタルアーカイブ <https://rmda.kuib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00012389>

明代日用類書は諸本間の異同が大きいが、異形の掲出順が本書に最も近いのは、先述のスペンサー・コレクション本が依拠した陽明文庫蔵の一本など、「不求人」系の日用類書である。

他方、最も多く異形を収載するのは万曆四十年（一六二二）刊『妙錦萬寶全書』である。その巻四「諸夷門」の「山海異物」は「神類」十五図、「禽類」三十一図、「獸類」七十七図、「魚虫類」二十三図、計一四六図を有し、本書の異形の大半はここに含まれる。また、多くの日用類書が「神類」に十五図を収載するのに対し、本書のそれが十四図である理由は、本来ならば「神類」に分類すべき「相抑氏」を「虫類」に分類したためである。

本書は、日用類書の諸本が「魚虫類」として一括した異形を「魚類」と「虫類」に二分しており、「虫部」には類書に見えない異形が含まれる。詞書に若干揺れが見られることなどからも、本書からは明代日用類書に拠りつつ、『三才図会』等を援用して内容の充実を図った痕跡が看取される。

このように、一連の作例は、本解題末に掲げた対照表にも見られるとおり、明代日用類書を素材として制作されたとみてよく、『山海異形』は大名家をはじめ、明代版本を利用可能な文化圏で制作享受された奈良絵本であったと考えられよう。<sup>(7)</sup>

同時に、どのような素材が奈良絵本とすべく選ばれたのかという、奈良絵本の特徴を考究する上でも重要な作例と思われる。

（石川透・齋藤真麻理）

#### 【注】

- (1) 清野謙次「奈良絵本『万国人種図譜』の発見」(『あんとろぼす』二一一、一九四七年二月)、同「奈良絵本『山海異形』」(『人類学雑誌』六一一一、一九四九年九月)。反町茂雄『蒐書家 業界 業界人』第一部・六「かくれた大蔵書家、清野謙次博士」(八木書店、一九八四年)に本書入手に関する記載がある。



- (2) Miyeko Murase, *Tales of Japan: scrolls and prints from the New York Public Library*. Oxford University Press, 1986. 仲川正子「スヘンサー・コレクション蔵『山海異物』」(『日本古書通信』八〇九、一九九六年十二月) Masako Nakagawa, "Sankai Ibutsu: An Early Seventeenth-Century Japanese Illustrated Manuscript," in *Sino-Japanese Studies*, May 1999, Vol. 11, Issue 2 (<http://www.chinajapan.org/archive.html>) など参照。
- (3) 朽尾武「日本における山海経図―山海経と山海異物―」(東洋文庫『東洋学報』九一―四、二〇一〇年三月) など参照。
- (4) 尾崎勤「怪奇鳥獣図巻」と中国日用類書(『汲古』四五、二〇〇四年六月)。
- (5) 小川陽一ほか編『中国日用類書集成』(汲古書院、一九九九―二〇〇四年)、中国社会科学院歴史研究所文化室編『明代通俗日用類書集刊』(西南師範大学出版社・東方出版社、二〇一一年)に影印を収録。京都大学谷村文庫本、市立米沢図書館等は全デジタル画像を公開。
- (6) 齋藤真麻理「描かれた異境―明代日用類書と『山海異物』―」『絵が物語る日本 ニューヨークス ペンサー・コレクションを訪ねて』(三弥井書店、二〇一四年)。
- (7) 明代日用類書「諸夷門」下段に立項される「諸夷雜誌」は、仮名草子『異国物語』の原拠であった(海野一隆「『異国物語』の種本」『日本古書通信』九〇二、二〇〇四年九月)。注(1) 清野旧蔵の「万国人種図譜」二種(天理図書館蔵『異国人物図説』)も『異国物語』と思しい。そのうち、六十図を有する一本(整理番号四六八―イ五)は「瓜哇國」の前に「蹠斯」を掲出する。しかし、「蹠斯」は日用類書「山海異物」の「禽類」に属する異鳥であり、従って、『異国物語』にも含まれていない。『異国人物図説』には「諸夷雜誌」の人物図と「山海異物」の禽類とが混在している。総じて『山海異形』や『異国人物図説』からは、明代日用類書を素材としつつ、さまざまに絵入り本が仕立てられた痕跡が窺われよう。なお、フランス国立図書館のルスエフ・コレクションには『異国物語』の奈良絵本が所蔵され、同館より全デジタル画像が公開されている。古典文庫『異国物語』(一九九五年)、齋藤真麻理「渡海の絵巻―いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』―」(『国文学研究資料館紀要』文学研究篇四四、二〇一八年三月) など参照。

【附記】

貴重な資料の掲載をご許可下さいました東京大学附属図書館に御礼申し上げます。

『山海異形』収録図諸本対照表

		『妙錦萬寶全書』 卷之四「諸夷門」 「山海異物」全146図 建仁寺兩足院本 「中国日用類書集成」12所収		『天理図書館本』 「山海異形」全113図		『スペンサー・コレクション本』 「山海異物」全47図		『東京大学本』 「山海異形」全26図	
		神類 (15図)		神類 (14図)		神類 (15図)		神類 (15図)	
		萬寶全書 番号		萬寶全書 番号		萬寶全書 番号		萬寶全書 番号	
1	兪兒		兪兒 (ゆに)	1	兪兒 (ゆに)		兪兒 (ゆに)		
2	榼泰		榼泰 (わうたい)	2	榼泰 (ほうたひ)		榼泰 (ほうたひ)		
3	蓐収		蓐収 (しよくしゆ)	3	蓐収 (しよくしう)		蓐収 (しよくしう)		
4	驕蟲		驕蟲 (けうちう)	4	驕蟲 (きようちう)		驕蟲 (きようちう)		
5	強良		天呉 (てんご)	8	天呉 (てんご)		天呉 (てんご)		
6	燭陰		強良 (きやうりやう)	5	強良 (きやうりやう)		強良 (きやうりやう)		
7	帝江		神魘 (しんぱつ)	9	神魘 (しんぱつ)		神魘 (しんぱつ)		
8	天呉		奢尸 (しやし)	10	奢尸 (しやし)		奢尸 (しやし)		
9	神魘		燭陰 (しよくいん)	6	燭陰 (しよくいん)		燭陰 (しよくいん)		
10	奢尸		蜚蠊 (ふくい)	12	帝江 (ていかう)		帝江 (ていかう)		
11	相抑氏		神陸 (しんりく)	14	相抑氏 (さうよくし)		相抑氏 (さうよくし)		
12	蜚蠊		神陸 (しんりく)	13	蜚蠊 (ひゆい)		蜚蠊 (ひゆい)		
13	鞞		鵲神 (じやくしん)	15	鞞 (お)		鞞 (お)		
14	神陸		帝江 (ていかう)	7	神陸 (しんりく)		神陸 (しんりく)		
15	鵲神				鵲神 (しやくしん)		鵲神 (しやくしん)		
禽類 (31図)		(禽類欠)		(禽類11図)		鳥類 (26図)			
16	畢方鳥				畢方鳥 (ひほうてう)		玄鶴 (けんくわく)		17
17	玄鶴				玄鶴 (けんくはく)		畢方鳥 (ひほうてう)		16
18	青耕 (東大本なし)				鸞 (らん)		鸞 (らん)		37
19	鳩鳥 (東大本なし)				比翼鳥 (ひよくのとり)		鸞 (らん)		33
20	樂鳥				鸞 (がくさく)		瞿如 (くじよ)		38
21	臙脂 (東大本なし)				螢鼠 (しそ)		螢鼠 (しそ)		39
22	鸚鳥 (東大本なし)				數斯 (すし)		鸞 (がくさく)		34
23	蠹悲 (東大本なし)				鳧溪 (ふけい)		比翼鳥 (ひよくてう)		25
24	跖斯				駝鷄 (だけい) ※以上上冊		數斯 (すし)		40
25	比翼鳥				鵲 (しゆ)		鳧溪 (ふけい)		42
26	鵲				鵲 (きよ)		鵲 (がく)		26
27	鴟鷂						駝鷄 (だけい)		45
28	絜鈎						鴟鷂 (しゆ)		36
29	精衛						跖斯 (そき)		24
30	鳥鼠同穴 (東大本なし)						鳴鶴 (こよ)		27
31	鵲						長尾鷄 (ちやうびけい)		46
32	當尾 (東大本なし)						飛魚 (ひぎよ)		146
33	鸞						馬鷄 (ばけい)		44
34	鸞						絜鈎 (けつきん)		28
35	鵲						精衛 (せいえい)		29
36	鵲						鵲 (せうふ)		35
37	鵲						鵲 (ぐ)		31
38	瞿如						鵲 (ふん)		—
39	螢鼠						鵲 (たい)		—
40	瘦斯						鵲 (よう)		—
41	鶴 (東大本なし)						樂鳥 (らくてう)		20
42	鳧溪								
43	白雉 (東大本なし)								
44	馬鷄								
45	駝鷂								
46	長尾鷄								
獸類 (77図)		獸類 (72図)		(獸類17図)		(獸類欠)			
47	白澤		白澤 (はくたく)	47	白澤 (はくたく)				
48	騶虞		騶虞 (しうぐ)	48	騶虞 (すうぐ)				

106	其人(天理本なし)	黒狐(こくこ)	74				
105	厭火獣	蠱雕	99				
104	三角獣	飛鼠(ひそ)	84				
103	長祿	駁(かう)	82				
102	天馬	罽	100				
101	黒人	羚羊(れいよう)	113				
100	罽	天馬(てんま)	102				
99	蠱雕	赤狸(せきり)	98				
98	赤狸	長祿	103				
97	玄豹	鹿蜀(ろくしよく)	117				
96	九尾狐	玄豹(けんしう)	61				
95	士羆	犍	—				
94	酋耳	犍(ばく)	—				
93	蟹蛭	豺(とう)	—				
92	白猿(天理本なし)	貂(とう)	—				
91	狒狒	羆(□) ※虫損	120				
90	猩猩	耳鼠(にそ)	116				
89	乘黄	玄豹(けんへう)	97				
88	角獣	諸犍(しよけん)	86				
87	赤豹	葱聾(にくりう)	55				
86	諸犍	旄牛(せきう)	60				
85	贊(天理本なし)	天犬(てんけん)	64				
84	飛鼠	兕(じ)	77				
83	梁渠	旋馬(せば)	75				
82	駁	獅(げん)	78				
81	鴉	天狗(てんく)	67				
80	癸	當庚(たうかう)	66				
79	山獠	九尾狐(きうびこ)	96				
78	獅	猛豹(まうへう)	56				
77	兕	酋耳	94				
76	比肩獣	蟹蛭(りうしつ)	93				
75	旄馬	犍(しやう)	59				
74	黒狐	猾裏(こうさう)	121				
73	變	乘黄(せうくはう)	89				
72	群多	厭火獣(えんくはじう)	105				
71	猛槐	吼(こう)	123				
70	朱孺	猴(こう)	118				
69	馬腸	福祿(ふくろく)	115				
68	羆	靈羊(れいやう)	114				
67	天狗	羆	68				
66	當庚	猛槐(もうくわい)	71				
65	類	類(るい)	65				
64	天犬	朱孺(しゆじゆ)	70				
63	羆羊	角端(かくたん)	119		角端(かくたん)		
62	龍馬	黒人(こくしん)	101		黒人(こくしん)		
61	玄豹	士羆(しろう)	95		士羆(しろう)		
60	旄牛	渥洼(あくあ)	53		渥洼(あくあ)		
59	狎	赤豹(せきはう)	87		赤豹(せきはう)		
58	青熊	狸々(しやうぐ)	90		狸々(しやうぐ)		
57	臙踈	變(き)	73		變(き)		
56	猛豹	梁渠(りやうきよ)	83		梁渠(りやうきよ)		
55	葱聾	鴉	81		鴉		
54	獲(天理本なし)	馬腸(ばちやう)	69		馬腸(ばしやう)		
53	渥洼	獬豸(かいち)	72		獬豸(かいち)		
52	羆	龍馬(りうめ)	62		龍馬(りうめ)		
51	狡犬	貌(ばく)	50		貌(ばく)		
50	貌	比肩獣(ひけんしう)	76		比肩獣(ひけんしう)		
49	窮奇	窮奇(きうき)	49		窮奇(きうき)		

107	幽頰 (天理本なし)	山獬 (さんへき)	79			
108	驪馬 (天理本なし)	獒 (へい)	80			
109	毫隸 (天理本なし)	角獸 (かくしう)	88			
110	泉下馬 (天理本なし)	狒々	91			
111	大尾羊	三角獸 (かくしう)	104			
112	鼬犬	臙躑 (くはんぞ)	57			
113	羚羊	青熊 (せいゆう)	58			
114	靈羊	辣 (とう)	52			
115	福祿	狡犬 (かうけん)	51			
116	耳鼠	鼬犬 (くけん)	112			
117	鹿蜀	大尾羊 (だいびよう)	111			
118	猴	羴羊 (かんやう)	63			
119	角端					
120	羴					
121	猾衷					
122	白鹿 (天理本なし)					
123	吼					
124	魚虫類 (23図)	魚類 (18図)			(魚虫類 4図)	(魚虫類欠)
125	應龍	人魚 (にんぎよ)	140		巴蛇 (はしや)	
126	比目魚 (天理本なし)	建同魚 (けんとうぎよ)	138		人魚 (にんぎよ)	
127	鱧	珠鼈 (しゆべつ)	136		長蛇 (ちやうしや)	
128	鰩鰩魚	蛤魚 (かうぎよ)	(133)		飛魚 (ひぎよ) ※以上下冊	
129	巴蛇	玳瑁 (たいしやう)	132			
130	阿羅魚	鱧魚 (をうりう)	124			
131	鯀魚	鯉 (りく)	127			
132	玳瑁	阿羅魚 (あらぎよ)	130			
133	鯀魚	玄龜 (けんき)	134			
134	玄龜	鰩々魚	128			
135	鯀魚 (天理本なし)	鯀魚 (ちうぎよ)	131			
136	珠鼈	鯉 (てい)				
137	長蛇	鯉 (とう)				
138	建同魚	鯉 (げい)				
139	納魚 (天理本なし)	鯉 (かう)	(133)			
140	人魚	鯉 (こう)				
141	鯀魚 (天理本なし)	魮 (ひ)				
142	牛魚 (天理本なし)					
143	鱓龜 (天理本なし)					
144	浮胡魚 (天理本なし)					
145	蚌魚 (天理本なし)					
146	飛魚 (天理本なし・東大本あり)					
	虫類 (9図)					
	相抑氏 (さうよくし)		11			
	巴蛇 (はじや)		129			
	長蛇 (ちやうじや)		137			
	雌 (い)					
	蛭 (き)					
	蛭 (まう)					
	蟲 (た)					
	蠅蛇 (ゆいじや)					
	蜚 (ひ)					

※齋藤真麻理作成。天理図書館本、スペインサー・コレクション本、東京大学本の( )内は原文の振り仮名。  
 ※天理図書館本「諸槌」は、原本はㄨ+建に見える。